田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

『天上の花』 2/25～

［2022年／日本／カラー／125分］ PG12

原作：萩原葉子「天上の花－三好達治抄－」
出演：東出昌大、入山法子、、浦沢直樹、萩原朔美、
　　林家たこ蔵、鎌滝恵利、有森也実、吹越満
脚本：五藤さや香、荒井晴彦
監督：片嶋一貴

詩人と恋愛と戦争と
いかにして詩は生まれるか

多感な青春時代に、萩原朔太郎や三好達治らの近代詩に触れ、心酔した覚えのある人は少なくないだろう。あの深遠な美しい詩の世界はどのように作り出されたのか。

この「天上の花」は、彼らを身近に見ていた朔太郎の娘・萩原葉子によって原作の小説が書かれた。それから56年後となる映画化にあたっては、原作者の息子・萩原朔美の協力も得ている。それだけの時間を経て、たくさんの記憶や記録を熟成させた甲斐があって、この作品は詩が生まれ出る不可思議に迫った佳品となった。

物語は、三好達治と朔太郎の妹・慶子のたった10ヵ月の結婚生活を軸に語られる。結婚はあえなく破綻したとはいえ、三好達治にとっては16年4ヵ月も恋焦がれた末に、妻子を捨ててまでたどりついた夢の実現だった。そして悲惨な離別ののちも、どうやら彼は一途に慶子に憧れを寄せていたようだ。

一方の慶子はと言えば、いくらいい詩を書いても貧乏人などまっぴらと公言し、当時としては珍しく、夫に尽くす、夫に従う、などという気は微塵もない。作中の朔太郎にも萩原葉子の小説でも、慶子は贅沢で我儘だとその俗物ぶりが嘲られている。だが、映画化にあたっては彼女の心の奥底にある思いがすくいあげられた。

時は日中戦争から太平洋戦争へと突入する戦時体制下。三好達治も戦意高揚のための戦争詩に手を染める。朔太郎も幾扁かの戦争讃美詩を書いた。だが慶子はと言えば、戦争がどうであれ、美味しいものを食べ、きれいな着物を着たい、という態度を崩さない。夫や世間の価値観に追随しない姿は、いっそ小気味がいいほどだ。そんななか三好は、結婚生活の現実と理想の差に苦しみ、慶子に暴力を振るうようになる。その三好について、慶子はこう言い放つ。「戦争に負ければいい。そうすれば男尊女卑の三好も自信を失って変わるだろう」

詩人を描いた映画は、とかく美しい詩を生み出した詩人への賞讃に偏りがちだ。だがここでは詩人の実生活、そこに深く関わった女性に比重が置かれたことで、逆に、生活を投げ出してでも詩を生み出そうとする詩人の熱気に迫ることができた。

田村志津枝プロフィール：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983 年からホウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。